
アラシのごとく！

猫耳執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラシのごとく！

【Nコード】

N1276BA

【作者名】

猫耳執事

【あらすじ】

サンタさん（CV 若●）の部下のミスによって死んでしまった主人公のお話

これからハヤテのごとく！の世界で頑張って生きます！！

プロローグ（前書き）

駄文です。

この小説の今後は読者の皆様しだいです。

ヒロインはヒナちゃんがいいな？

作者の更新速度は感想＋お気に入り＋評価で決まります。

プロローグ

「……みんな聞いてくれ、今俺の目前に変なおっさんがいるんだ。」

上から下まで赤と白のめでたそうな衣装を纏って真っ白なお髭を蓄えたおっさんがいるんだ……。見るからにサンタの格好をしたおっさんがな!!!!

しかも

「おゝまえは死んだのだよゝ若者よゝゝ」

すごく聞き覚えがある声をしてるんだ!!ド・ゴン・ールのセ・や某魚介類だらけの国民的アニメのア・ゴさんの声なんだっ!!

「いゝゝかげんにこちら話を聞きたまえゝゝ」

「なんですか?わかも……。ところであなたは誰ですか?」

「君に素う晴らしいプレゼントを贈りにきたサゝンタさんだよゝゝ(キラッ)」

「……とりあえず、クリスマスは過ぎてますよ?」

「そんなことはわかってるよ。君は馬鹿なのかね?」

「(イラッ)なら何しに来たんですか?もう新年なのでサンタなんか呼んじゃいませんよ?」
「言うかここ何処だよ?今すぐ家に帰せ馬鹿野郎!」

「いや、ちょっととしたミスでね、君の家に部下のソリが突っ込んでしまったのだよハッハッハ。そのソリが君に直撃してしまってねえ、君は新年早々死んでしまったわけなのだよ。その部下は今頃北極圏のどこかでトナカイに引きずりまわされているだろう。ぶるあああああつ!!」

「はあ?!何言ってるのおm」
「そんな訳で、神や魔王とよく酒を飲んだりして、ここころやさしいサントさんがあ、きみに新しい人生をプレゼントしちゃうぜえ、ハイ拍手う!!」

「てめえ何わけのわか」
「ハイ拍手う!!」
「おm」
「ハイ拍手う!!」
「だか」
「ハイ拍手う!!」
「……(パチパチパチ)……死んだのは分かったけど新しい人生ってどういうことだ?!」

プロローグ（後書き）

感想待ってます＋あなたの一番好きなキャラクターに対する一言も待ってます

そういえば原作で自分の好きなアニメ（ゲームだったっけ？）のキャラが違う二人（駄目主人と書記）が言い争うってシーンあったっけ・・・

第一話 紅いサンタクロース（前書き）

本当のサンタは黒色の衣装を着ていたそうです。

今の赤白サンタは、コカ・コーラのイメージキャラクターとして採用された際の物が世界に広まって標準化してしまったそうです。

第一話 紅いサンタクロース

（十六年前）

ここは安いと評判の産婦人科の一室。

つい先程ここで、また新しい命がふたつ生まれた。

その子たちの親は早速自分の子供たちに名前をつけるようだ・・・

父「ハヤテだ、この子の名前はハヤテ。ハヤテと名づけよう」

母「まあいい名前。でも、どうしてなの？」

父「そんなの決まってるじゃないか母さん。借金取りから疾風はやてのように逃げられる強い子に育ってほしいからだよ」

「・・・・・・・・」（赤ちゃんハヤテ、あきれて泣き止む）

母「ならもう一人のこの子はどうするの？」

父「それももう決めてあるさ。ハヤテの双子の弟に当たるこの子の名前はアラシ、綾崎アラシさ」

母「ハヤテと同じでいい名前ね。で、どうしてなの？」

父「簡単だよ母さん。借金取りを嵐あらしのように叩きのめしてくれるような力強い子に育って欲しいからさ」

「……………」（心の中で「暴力で解決しようとするなよ！」とツツコム赤ちゃんアラシ）

母「へえ、それはすてきな名前ねえ」

父「だろー、僕天才なんだ。これでいつ子ども達を置き去りにして逃げることになっても安心だよ」

母「さすが父さんね」

父&母「ははははは」

こうしてハヤテ、アラシと名づけられた少年達は、生まれた日から完全無欠の能力を身に着けるべく、宿命づけられたのであったあ。

（C V 若●）

h a y a t e S I D E

その昔、夢に出てきたサンタに聞いた。

「ねえサンタさん……どうして僕達にプレゼントを持ってきてくれないの？」

『それはね、お前達の家がビンボーだからだよ。』

「……!!（ガーン）」

サンタは噂以上に正直な奴だった。

「ええ！？で・・・でもそれじゃ僕達はどうしたらいいのさ！？アラシにゲーム買ってあげるって言っちゃったのに！！」

『働け少年！！「働かざる物喰うべからず」欲しい物は自分でどうにかしろ。だが信じる・・・最後に笑うのはきっと・・・・ひたむきでマジメな奴だから・・・それでもお前達にはプレゼントはやらないけどn《てめえー！！まちやがれえー！！》・・・厄介な奴が来よったのう』

《ハヤテ！！こんな奴のことなんて聞かなくていい！！こいつは今すぐ俺が殺る！！死ね！このクソサンタ！！積年の恨みここで晴らしてやる！！》

『ちょ、おま、去年よりもパワーアップしてね！？というか自分の兄の夢に乱入ってどんだけだよ？！』

《黙れ！！お前が実行犯だって事を知った後から俺は毎日鍛錬を欠かさなかったんだよ！！某公式チートさんも言ってたろうが！「気合で何とかなる」って！！》

「（ポカーン）」

僕はこの後、自分の双子の弟がサンタを血まみれになるまでボッコ

ボコにする様子をただただ見ていることしかできなかった。

《ふう、これでいろいろスッキリしたぜ!!》

弟のものすごくいい笑顔がとても印象的だった。

第二話 僕らとヤッサンのランデブー（前書き）

お気に入りはまだ三件だと・・・・・・・・

とりあえず三名の皆様ありがとうゴザイマス

総アクセス数が200を満たないこの現実・・・・・・・・orzガクッ

第二話 僕らとヤッサンのランデブー

a r a s i S I D E

生まれたときから前世の知識を完全に覚えていた僕は、幼児ゆえの羞恥プレイを乗り切り、幼い頃から夢に出てきた仇を^{サンタ}ぶん殴り（とてもつらい修行をしたことは言うまでもない）、自分の親の破綻振りを思い知らされながら生きてきた。

今になってはサンタからもらった特典とやらにとっても感謝している。

新しい生を受けてから早16年……

今僕はとても焦っていた

「迂闊だった！！都内から出れば流石にはれないだろうと思ってたのに！！！」

県外の有名な万屋^{ちやい}《決して万屋銀・なんて名前じゃないからなっ！！》にアルバイトとして勤めていた僕は自分の考えの甘さを後悔していた

「これじゃ年が越せないよ！！まさか職場に押しかけて子供の給料騙し取っていくなんて！！！」

せっかく家から車で四時間はかかるような遠い職場を探したって言うのに、それを見つけ出して「急に祖母の入院がしてしまつて……・アラシにはもう言つてありますからどうか今月分の給料前借させてくれませんか？」なんて言つて数十万全額持つていくなんて……

しかも年齢を偽って働いていたことまでばらして行つたせいで社員さんからは「流石に高校生をこのまま働かせるわけには行かないから・・・ちゃんと卒業したらぜひこの会社に来てね!」って言われて・・・気持ち嬉しいですけど今お金がいるんですよ!!

『もし両親が借金してた場合、返済に充てるための貯金』を下ろすしかないか……

「とりあえず、ハヤテと相談しないと。ハヤテ、帰ってきてる？（ガラッ）」

「アホ——！！！」

「いきなりどうした!!……とりあえずその手に持っているものつつごい桁の借用書から今の状況は理解したわ。とにかく逃げるぞ!!」

『ゴラア綾崎い!!息子達もらいに來たぞ——!!出て来いやゴラア!!』

「ほら來たぞ!こつちだ!!早く!!」

「わ、わかった!!」

h a y a t e S I D E

「とりあえず差し押さえの手が回る前に銀行から現金下ろしてくるから公園で待ってて!!」

そう言ってアラシはどこかに行ってしまった……いつの間に

貯金してたんだけ？

それはさて置き……あのタイプのヤクザは一億五千万なんて金額の借金を絶対見逃すわけがない！！

綾崎家の双子は両方とも長年の経験からどのタイプのヤクザかを一目で見分けられるというできれば一生目覚めて欲しくない能力を持っていた！！

幾らアラシでも一億五千万なんて金額を貯金してるはずがないし、そんなはした金持つて行っても臓器を売られてしまうのは確実！！

僕らみたいな人間が……てつとり早く一億五千万作るには……それこそ強盗か身代金目的の誘拐くらい……

こうして少年は勝手に一人で思考を突っ走らせて悪の道へ進もうと
していったのであったあ（ＣＶ・本）

第三話 ロリコンに育てたつもりはありませんっ!!!(前書き)

少し評価が増えて嬉しいです!!

ネロの命日↓12/24

第三話 ロリコンに育てたつもりはありませんっ！！

a r a s i S I D E

無事に通帳から全額下ろすことができた僕は、ハヤテとの待ち合わせ場所である負け犬公園（嘘じゃないよ！！）に急ぎました。

すると

「人の獲物に手を出すなあ！！ネロの命日にナンパなんて！！お前らどこのパトラッシュだ！！帰る家がある人はとつと家に帰れ！！」

大声で意味のわからないことをほざいている兄がいました・・・

まあ、小さい少女をかばったの行動だったみたいで、あっコートを貸してあげるなんて親切ですね？身内としては優しい子に育ってく

れて嬉しいかぎりです。

ですが

「僕と．．．．付き合ってくれないか？」

「へ？」

ロリコンに育てた覚えはありませんっ！！

「僕は．．．．（人質として）君が欲しいんだ。」

今までそんな様子はなかったのに．．．．兄をこの手で始末しないといけなくなるなんて．．．

「命がけさ．．．．一目見た瞬間から．．．．君を．．．君を（人質として）さらうと決めていた」

「はい、ちょくちょくとこっちに来ようか？ハヤテ君？（ギリギリギリ） そのとっても可愛いお嬢さんはちょっと待っててねく？あ、あと君のお家の電話番号も教えてくれる？」

「かつ可愛い／＼／．．．わ．．．わかった．．．」

「じゃあ、ちょっと待っててねく．．．．オラア！早く来い性犯罪者！！」

「ち、違っんだ！これはちょっと魔が．．．って性犯罪者！？僕はただ身代金を．．．」

「．．．．今ならまだ未遂で済むから．．．．警察んと、公衆電話発見！！とりあえず、保護者の方に連絡を．．．「きゃー！雪で滑ってー！！そこをどいてくださーい！」はい？」

目の前には迫り来る自転車が．．．ドコンッ！！

「あ．．．お．．．う．．．げふ。（バタ．．．）」「

こうして少年達の人生は、幕を閉じたのであったあ（CV・本でお送りしております）

「あの……ごめんなさい……だ、大丈夫ですか？」

「ててて………」

……生存能力は黒いG並みの少年達なのであったあ（CV、
若●でお送りしていますってばあ）

第四話 運命は英語で言うとデステイニー（前書き）

お気に入りが増えになりました！！

ありがとうございます！！

第四話 運命は英語で言うとデステニー

a r a s i S I D E

「あ・・・お・・・う・・・げふ。（バタ・・・）」

「あの・・・ごめんなさい・・・だ、大丈夫ですか？」

「ててて・・・」

ハヤテを抱えて避けることくらいはできたけど・・・あのタイミングで来られると避けるわけにはいかないじゃないですか、避けたらこの女性が怪我をしてしまうかもしれないでしたし

「あの・・・お医者さん呼びましょうか？」

「・・・」

綺麗な人ですね・・・今まで見た女性の中でも1、2を争うような・・・

・・・って完全にハヤテは見とれちゃってますね？

「あの・・・体は？」

「体がどうかしましたか？（スクツ）」

「（・・・・・・・・）えつと・・・・・・・・」

「ご心配なく。頑丈だけ取り得ですから。」

「（・・・・・・・・）では、そちらの方は・・・・・・・・」

「ああ、ぜんぜん大丈夫ですよ？コレでも兄よりは丈夫ですから。」

「あら、ご兄弟だったんですか？それは気づきませんでした。」

「（お・・・驚いたよパトラッシュ・・・世の中にはこんなキレイな人がいるんだよ・・・お前は犬だからわかんないだろうけど。）」

「（ハヤテは今絶対変なこと考えてんだろーな・・・）一応双子な

んですよ？二卵性なので似てませんけど・・・」

「そうなんですか・・・えっと・・・そのお兄さんは本当に大丈夫ですか？ボーとしてらっしゃいますけど？」

「へっ！？はい、もちろん！！頭はいつもゆるんでいますから！！」

「あの・・・ご無事でしたらちょっとお聞きしたいことがあるのですが・・・よろしいですか？」

「え？なんでしょうか・・・？」

~~~~~

「あなた、恋人とかいますか？」

『！-！-』

『自転車であなただを轢いた瞬間思ったんです・・・これは運命。英語で言うところのデスティニー。ですから私、あなたのことが・・・』

『ドキドキドキドキ』

~~~~~

「（なんて嬉しい展開に……せつかくのクリスマスだし……
やっぱ……）」

「ジトーー（ハヤテの奴……絶対へんなこと考えてんだろうな・
……ハア……）」

「（うーん……本当に大丈夫かしら……）」

「……で、その子の特徴は？性別とか、来ている服の色とか、年
齢とか……」

「女の子を探しているんです。13歳になるちっちゃい女の子なん
ですけど……」

「もしかして……パーティードレスとか着てませんでした？髪
型はツインテールで……」

「そうなんです！！あの世間知らずだから……誘拐犯にだま
されてヒョヒョイついて行かないか心配で……って心当たり
があるのですか？」

「はい、ちょうど今ご自宅に電話w「そいつ!!!」「ゴフウ!!!ハ、ハヤテ・・・貴様・・・ガクッ」

「（借金を返すためにもここで失敗するわけにはいかないんだ!!）悪いですけど・・・知りませんよ・・・（誘拐する）予定がありますから僕たちはこのへんで・・・」

「そ、そうですか（弟さんがいきなり倒れかけたけど・・・大丈夫かしら?）・・・もう少し探してみます・・・あ!!あの・・・ちよっと待って。」

「はい?（フワッ）・・・え?」

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると・・・風邪を引いちゃいますよ・・・?」

「・・・（じわっ）えぐっ・・・」

「え?」

「うああああ・・・（ポロポロポロ）」

第五話 時速80キロ（前書き）

日刊ランキング乗れば……

お気に入りも増えるはず!!

と言うことで頑張ります!!!

あと、一話あたりの長さを長くしたほうがいいのか？

第五話 時速80キロ

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると・・・風邪を引いちゃいますよ・・・?」

「・・・・・・・・(じわっ)えぐっ・・・・・・・・」

「え?」

「うああああ・・・・・・・・(ポロポロポロ)」

「ええ?え?え!?あの・・・・・・・・私何か悪いことでも・・・・・・・・!?!」

「ごぶっごぶっ!・・・・・・・・ハヤテ!お前いきなり殴りやがっ・・・・・・・・何この状況??」

「あの!..その女の子ですけど・・・実は!..!」

『誰か――――!..!..!』

『ぐっ!!何をする!!離せ!!』

『うるせえ!!ちっ!!大人しくしろ!!』

『くっ!!離せ!!離せ!!』

ボタン

ブロロロロ...

「.....」

「.....」

「目の前で誘拐されてったよあの子.....」

「大変!!あの子ったら!!本当に誘拐されてる!!!!どうしましよ
うどっしましよ!!?と...とりあえず警察を.....!!」

「……自転車……ちょっとお借りしますよ。あと警察に連絡を……」

「え？ちよ……君！？」

「ご心配なく。僕が必ず追いついて、あの子を助けてみせます。」

「で……でも、相手は車よ！！！！そんな自転車なんかじゃ……絶対に追いつけるわけが——（ゴツ）ない……」

「ハヤテの奴いつもの二倍くらい飛ばしてるな……？じゃあ、警察はお願いします！！」

「へ？君は？（ギョオツ！！）……人間辞めてませんか？」

この二次創作の主人公は決して人間辞めてるわけではありません、

一度死んじゃってますけどお（C V ' w a k a • o t o で す っ て ば
あ）

第五話 時速80キロ（後書き）

日刊ランキングに乗ってもお気に入りが増えなかったら・・・

ガクブルガクブル・・・

第六話 そのニット帽はハゲを隠すため・・・

「まったくこうもあっさり誘拐できるとはな!!」

「一人になってくれて助かったぜ!!」

「・・・・・・・・・・（怒）」

「ところでアニキ、先程から人質が恐ろしい殺意を持った目で睨んできているのだが・・・」

「気にするな!!」

「おい、その馬鹿二人・・・お前達に少し頼みたいことがあるのだが・・・」

「ふははは!!何だ小娘!?一得が泣き叫んだって無駄だぜ!!」

「こっちは借金で生きるか死ぬかの瀬戸際なんだ!!ちょっと大人しくしてもらおうか!!」

「空気が汚れるから、呼吸をやめてくれないか？環境破壊だぞ。大切にしろよ、地球は。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こ・・・・このガキ!!」

「まあ、待て!!人質殺したら元も子もねえ!!まだそいつの身元わかってねーんだから。それとてめえも・・・・あんまりナメた口は利くなよ!!こちとら博打で作った借金で、危ねーチワワに臓器狙われてる身だ・・・・だからオレ達を怒らせると・・・・少々痛い目見る事になるぜ。」

「だから・・・・・・・・呼吸するなと言っただろ？ハゲ!!」

「!!!!!!」

「・・・・・・・・この・・・・」

「つーかお前も、その馬鹿丸出しのグラスンはどこのファッションリーダー気取りだ？それともあれか？宗教か？馬鹿の神様を光臨させる儀式の途中なのか？」

「てめえ、アニキのハゲは馬鹿にしても、グラサンだけは許せねえ
—————！」

「ばっ！！誰もハゲてねえーよ！！」

「こうなりや大人を馬鹿にするとどうなるか、身体に教えてやるぜ
！！」

「え！？弟よ！！いつからそんな子供好きに……………」

ドカァ！ミシィ！！

「ち……近寄るな変態……それ以上近づいたら…………人を呼
ぶぞ馬鹿者！！」

「はっ！！馬鹿はお前だ！！小娘！！時速80キロ以上でぶつとば
す車に、呼べば来る奴がいるとも思っのか！？」

「いるさ！！命がけで私をさらうと誓った。だから呼べば来るさ！
」

「だったら今すぐ呼んでみやがれ!!」

——ハヤテ!!

ゴウッ!!!

「!!なに!!」

ズガガガガ!!

ギッ!!

「おい、この悪党ども!!おとなしくその子をかえ——

「おい!!ハヤテ危な——

ドガァ!!!!!!!!!!

第七話 やり残したこと

「いるさ……命がけで私をさらうと誓った。だから呼べば来るさ！」

「だったら今すぐ呼んでみやがれ……」

——ハヤテ……！

ゴウッ……！

「……なに……！」

ズガガガガ……！

ギッ……！

「おい、この悪党ども……おとなしくその子をかえ——」

「おい……ハヤテ危な——」

ドガァ!!!!!!!!!!

「あつ!!アニキ!!アイツら轢いちまりましたよ!!もしかして・
・殺しちまったんじゃない」

「っせえ!!いきなり目の前に出てくる奴が悪いんだよ!!」

「おい・・・お前達!!よくも・・・よくも二人を!!」

a r a s s i S I D E

「おい、この悪党ども!!おとなしくその子をかえ——

「おい!!ハヤテ危な——

ドガァ!!!!!!!!!!

ハヤテに少し遅れて誘拐犯の車に追いついたのはいいけど……
見事に轢かれたなあ……ハヤテが勝手に飛び込むから……

地面に落ちるまえにキャッチするのはいいけど……血でベッタ
リになるな……仕方ないか……ってんん？

クルクルクル……ゴッ！！バンッ！！（ハヤテが回転しながら
車のボンネットに飛び乗った音）

「あ~~~~悪いんだけど……その子を僕に……返してく
れる？」

「は……はい……」

……心配なかったか……血の残量以外は……

ウ~~~~ファンファンファン

警察も来たし、誘拐犯は任せてハヤテの手当てを…………

「おい、馬鹿アニキ。さっさと傷見せる。止血すつから」

「ああ、ごめんねアラシ…………」

「おい!!お前その傷——」

「あ…………よかった無事だった?」

「ん…………うん…………私はね…………」

「君が無事で…………本当に良かった…………」

「またお礼しなきゃな。／／／」

「だったら…………今度は僕らの…………新しい仕事でも…………見つけて——」
「おっとっ（ドスッ）グフウ!!ハヤテ…………
お前…………オレに恨みでも…………ガクッ」

「え！？お・・・おい！！」

「ナギ！！」

「おお！！マリア！！そいつらの応急手当を頼む！！私のケータイを！！」

「へ？え、え」と・・・

・ 薄れていく意識の中でさっきのお姉さんの声を聞いた気がした・・・

第七話 やり残したこと（後書き）

「（ピッ）クラウド、私だ。位置はわかるな？大至急医療班を手配してくれ。1分以内だ。」

「あの・・・とりあえず見た目ほどひどいケガではなさそうですよ。弟さんの方は傷一つありませんし・・・」

「な、なにい!!」

この作品の主人公は某公式チートさんと同等の頑丈さで御座います
う（CV・NW）

第八話 お風呂にはロマンが詰まっている

「この男たちを．．．私の新しい執事にする。」

「．．．．．えっと、話の流れがよく理解できないのですが．．．」

「ま．．．命の恩人の頼みというのもあるが．．．．．なんと言
うか、その．．．．．そっちの男に告白されたんだ。さつき公園で．
．．．とても情熱的に．．．『君をさらいたい』とかなんとか．
．．．こっちの男も．．．私のことを．．．とっ．．．とつても
可愛い．．．お嬢さんって．．．（カアアア／／／／）」

「はあ!？」

「ご兄弟のお兄さんの方はまあ確かに、頭を相当激しく打ったようですが……命に別状はありませんよ、命には……おそらく日ごろからかなりしつかり鍛えていたのでしょう。驚異的な頑丈さですよ……頭は元から悪そうですし、顔も貧相ですが……弟さんの方は……本当に時速80キロの車に轢かれたのか？　つてくらいなんともありません。お兄さんよりもさらに鍛えていたのでしょうか……彼はもう私達と同じ人間なのか怪しいくらいですよ。気を失った原因はただの睡眠不足でしょう。最近ばかり寝ていなかったんじゃないですかね？　まあ、何かあれば呼んでください。」

「はい先生、ありがとうございました。」

「で？　どういっいきさつがあっただんですか？」

「何が？」

「何がって……あのご兄弟とのいきさつですよ。お兄さんは自転車で車に追いついたり、その車に轢かれても命に別状はなかった

り・・・弟さんは走って車に追いついてお兄さん同様轢かれて無傷だったり・・・もはや人にカテゴリーされるのかわからないと思うんですけど。」

「そりゃあ私の執事になる兄弟だ。きっと体は新造細胞とかできているに違いはない!!」

「いいんですか、人間じゃなくて?」

~~~~~ナギがマリアに事情説明中~~~~~

「ま・・・概ねナギの方の事情は理解しました。あの方達が起きたら知らせますから自室にいて下さい。」

「うむ、わかった。とにかくあいつらを私の執事にするから。」

バタンッ

「(さてさて・・・どうしたものでしょうか・・・)」

a r a s i S I D E

「う、うゝん．．．ここはどこだ？」

目の前にはものツすぐく豪華な調度品の数々が．．．

「ここは．．．もしかして天国．．．な訳ないな。もう一度死んだら確実にあのクソサントの元に行くはずだし、もとより怪我なんかしてないしな。．．．．．と言うことはあのパーティードレスのお嬢さんの家と言うのが最有力か．．．とりあえずハヤテが何か起こす前に見つけ出さないと、お風呂で何か起こしそうな気がするし．．．．．」

この小説の主人公はよゝゝゝく！！兄のことを理解しております  
(C V ' W)

ガチャ

「とりあえず誰か人を見つけてハヤテの事を聞かないと。．．．．．  
．．．こっちのほうから人の気配がする。」

廊下に出て人の気配がするほうへ向かって行く。

それにしても……この家……いや、屋敷はとても広い割りに人の気配が少ないな？

一番近い人の元に着くまでに一分は掛かりそうだ。

「（あつ人がいる！）あの……？」

「ムウ？誰かな？この三千院の屋敷を無断でウロつく変質者は……」

「へ？」

このおじさんいきなり何を言ってるんだ？

「成敗してくれる……喰らうが良い……クラウドスキーク……ッ！」

「はい……？『気合防御』……！」

ガキン！！

「その身のこなし・・・只者ではない・・・お前は何者だ？」

~~~~~状況説明中~~~~~

「先程お嬢様が運ばれてきた方でしたか。こ、これは失礼しました。このたびはお嬢様を助けていただいてありがとうございます。あと、お兄様のお部屋は申し訳ありませんが私は存じ上げておりません」

「そうですか・・・わかりました、とりあえず部屋に戻ってきます。これ以上動き回ってすれ違いになってしまったら大変です」

「申し訳ありません。早急に対処しますので・・・」

「いえいえ良いんです。兄は少しに抜けているところがあるので心配だったからです。」

「いえ、お嬢様からは客人として迎えるように申し付かっておりま

す。確認してきますのでこの部屋でお待ちになっていて下さい、すぐに使いのものを出しますので。」

「そうですか・・・ならお願いします。」

ガチャ

ボタン

「綾崎アラシ・・・あの身のこなし・・・姫神の公認に最適かも知れんな？考えておこう。」

こうしてアラシはこの屋敷の執事長クラウドに認められたのであった。

~~~~~その頃ハヤテは~~~~~

「・・・・・・それにしても、本当に頑丈なんですネ・・・・・・体・・・・・・」

「へ？」

「だって・・・あんなに激しく車にひかれたのに・・・命に別状はないといえ、深い傷を負っているのにお風呂に入るなんて・・・」

「・・・・・・・・・・」

「普通だったら、傷口が開いちゃいますよ〜」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「ゴファッ!!--!」

「キャアアア!!--!」

大浴場で今度こそ本当に死に掛けていたらしい

## 第八話 お風呂にはロマンが詰まっている（後書き）

なぜ、ナギが誘拐されたときにハヤテしか呼ばなかったのかと言いますと、ただ単に名前を知らなかっただけなんです。

請求書の裏にはハヤテの名前しかなかったのです。

アラシはもともと

「クリスマスプレゼントなんて要らない！！（サンタが嫌いなため）

」

と言っていたのでこうなりました。

## 第九話 自白↓自爆

h a y a t e S I D E

ああ・・・今度こそ本当に死んだ・・・あんな深い傷を負ったのに今の状況を夢と勘違いしてお風呂に入っちゃうなんて・・・

いや・・・もしかしてこれは死ぬ前に神様が見せてくれた夢なのかな？

アラシには悪いけど・・・目を開けば今度こそ・・・ネロとパトラッシュがいる天国で・・・

「さっさと起きろ、このバカ兄貴！！（ドスッ！！）」

「ガフウ！！ア、アラシ・・・僕は死んだはずじゃ・・・？」

「お目覚めですか？綾先ハヤテ君？」

「あ・・・あなたは・・・さっきお風呂場で・・・」

「ずっと！お屋敷に運ばれてからずっと寝てましたが大丈夫ですか？」

「……………」

「僕……ずっと寝てましたか？」

「もちろん！ずっと寝てましたよ！！」

「(ジーーーーーーーー)」

「そうか……じゃあやっぱり……あれは夢だったんだ。ん？あれ……？それにしてもなんでこんなにフトンが濡れて……」

「……ね……寝汗ですよ寝汗！！ハヤテ君、すごくうなされていましたから。」

「(ジーーーーーーーー)」

「……さっきからどうしてアラシはそんな目で僕を見てるの？」

「いや〜べつつに〜？予感が当たったんだな〜って思ってただけだから気にしないで？（ジツ……ト〜）」

「ま、まあいいけど……あ、でもさっきからどうしてメイドさんは僕の名を？……ていうか、ここどこですか？」

「え〜と……」

~~~~~説明中~~~~~

「ハヤテ君の名前はこちらから……悪いとは思いましたが……中を拝見させていただきました。」

「あ……」

「しかし大変な状況のようですね。」

「いやあ、たいしたことないですよ……アラシもいることです

し。
」

「それは頼もしいですね。ところでハヤテ君、お嬢様が来る前に少しお話したいことがあるのですが・・・その・・・先程のお嬢様との公園での一件について・・・」

「（ピキッ）」

「（これはフォローが必要になりそうだな・・・）」

「さらうとかどうとか言っただけ・・・」

「すみません！！すみません！！誘拐なんて二度と――！！」

「・・・え？・・・誘拐？」

「――！！（はっ！）」

告白――

隠していたことを自分から打ち明けること。

自爆

今のコイツのような状況。

「ええっと・・・少しお話聞かせてもらえますか？」

「は・・・はい・・・」

その後被告の弁明は30分以上続いたという・・・

「はあ～～～、この馬鹿は・・・全く・・・」

第九話 自白↓自爆（後書き）

感想、評価お願いします！！

第十話 カラ回る想い（前書き）

作者帰宅後・・・

「ふ〜んふ〜んふ〜ん（ポチツウィ〜ン）・・・感想の確認しないと・・・ん？・・・んん！？ひよ・・・評価がすごいことになつとる！〜！」

日刊ランキング66位に載ってました・・・

ありがとうございます！！！！！！

第十話 カラ回る想い

a r a s i S I D E

「・・・なるほど。ハヤテ君達の方の事情は理解しました。」

「その・・・お嬢さまのことを知らないとか、嘘をついた事も謝りますから・・・どうか・・・この件についてはどうか見逃してほしいというか・・・」

「本当は僕がご自宅に電話する直前だったんです。迷子だって言うことはすぐにわかりましたから・・・兄も魔が差してしまっただけなんです。どうか、見逃してもらえませんか・・・？」

「いやまあ確かに・・・人は仕方なく嘘をつくというのもありますし・・・」

まったく・・・ハヤテが最初から誘拐なんて考えなきゃこんな事にならなかったのに・・・
でもどうにか見逃してもらえそうで助かった・・・

「と言うか実は……ハヤテ君の『さらっ』とかどうとかというセリフとアラシ君の『可愛いお嬢さん』というセリフを……あの子ですね——」

「おおなんだ、もう起きていたのか。」

「あ……」

「どうだ？体の具合は？」

「うん……もう平気……ありがとう。」

「ハヤテはともかく僕はただの寝不足みだったからもう大丈夫だよ。」

「でも……さっきはゴメン。公園で……あんなこと（誘拐未遂）……」

「僕も……もっと（兄を）抑えられたら良かったんだけど……」

「ん……いやその……（生まれて初めての愛の告白……」

しかも二人同時から・・・驚いたけど・・・嫌ではなかったし・・・ただ私達は互いの事をよく知らないから・・・やっぱりすぐにつてのはよくないというか・・・どちらかを選べって言われても選べないっていうか・・・」

「・・・（あれ・・・この子達見事に誤解しまくってませんか？これは・・・どうしましょう・・・）」

「うん・・・そうだね・・・（誘拐未遂の罪悪感）」

「たしかにそのとおりだと思う・・・（兄を未遂とはいえ止められなかった罪悪感）」

「で・・・私もあれから考えたのだが・・・お前達、仕事探していただろう？」

「え？う、うん・・・」

「だったらこの家で・・・私の執事をやらないか!？」

「・・・執事?」「」

「あの、お嬢さま・・・そういうのはよく事情を聞いてからの方が・・・」

「けど、姫神の後任は必要だぞ。姫神の後任がないから誘拐とかされるわけだし・・・!!」

「執事・・・」

こんな僕達に・・・住み込みの仕事をくれるなんて・・・なんて優しいんだ・・・

「でもハヤテ君とアラシ君は・・・執事ってどんな仕事かもわからない――」

「やります!!」

「お任せ下さいお嬢さま!!何があろうと僕らが命をかけて・・・あなたをお守りいたします!!」

「そのとおりです!!たとえテロリストに狙われてもお嬢さまを無傷で守り通して見せます!!」

「ば……ばか……マリアの前で照れるような事を言つな・
・」

「(ど……どうしましよ……どうしましよ……この天然さん達
は……)」

こうしてただ一人事情を理解しているメイドさん以外は、全くもつ
て不毛な方向にカラ回るのであつたあ……

第十一話 「・・・マリア・・・それは人間ではない・・・どこかのDrin

決して主人公はロボットなんかじゃありませんよ!!

第十一話 「……マリア……それは人間ではない……どこかのDrin

「新しい執事？」

「ええ、お嬢さまがお雇いになると……どうします？クラウドさん。」

「うむう……執事長としては姫神の後任が欲しいところであるし、あのアラシという男の身のこなしは只者では……どんな兄弟なのだ？その綾崎兄弟は……」

「ええと……そうですねえ……お兄さんのハヤテ君は時速80キロで暴走する車に自転車を追いついて、そのままゴミのように轢かれても平気だったりする子ですわ？」

「……マリアよ……それはどこのガンダムだ？」

「いえ……一応人間ですけど……弟さんのアラシ君は時速80キロで暴走する車に走って追いついて、そのままゴミのように轢かれても傷一つ付かない子です」

「・・・マリア・・・それは人間ではない・・・どこかのDr・スランプが造った人間型アンドロイドだ・・・」

「一応人間のはずですよ・・・アンドロイドの件は否定できませんが・・・」

「無理だ！ガンダムとア●レちゃんに三千院家の執事は務まらない！帰ってもらいなさい！！・・・と言いたところであるがお嬢さまの意向でもある・・・今回だけは後日試験を行うこととしよう。お嬢さまにお伝えしておきなさい。とにかくわしは明後日まで戻らるので・・・その間、問題のない様にお願ひしますよ！！」

バタンッ

「ふ~~~~っ、一応どうにかなりそうですね・・・試験ですかあ・・・」

~~~~~  
~~~~~

a r a s i S I D E

「え？この屋敷って3人しか住んでいないの？」

「ああ。この家は別宅の中でも特に小さいからな。たいして使用人は要らないんだ。」

「・・・アラシ・・・これがブルジョワってヤツなのかな・・・？」

「・・・僕に聞いても分かる訳ないだろう？で、お嬢さま、何故わざわざその小さい別宅に住んでいるのですか？」

「まったく・・・ビンボー人の僕達がそんなことを知ってる訳ないじゃないか。」

「うむ、私は小さくて狭い家の方が落ち着くからな。」

「「そうか（ですか）」」

この僕達にとってのお屋敷がお嬢さまにとっては小さくて狭い家・・・

これが価値観の差というヤツなんだなあ・・・

「でもそんなに人が少ないと余計に緊張しちゃうな。」

「???何を言っているのだ?」

「だって、住み込みって事は僕もこの屋敷に居候するわけでしょ?」

「それはそうなるな。」

「だからその・・・いくら広いとはいえ可愛い女の子と・・・一つ屋根の下っていう状況は・・・やっぱ緊張しちゃうっていうか・・・その・・・」

「たしかにハヤテの言うとおりだな・・・」

可愛い女性と可愛い女の子の2人がこのお屋敷には住んでいるからなあ・・・

ああ、あと髭の人もいたっけ?

「バカ!!そんなふうな言い方をするな。こっちまでテレるじゃないか!!ノノ・・・大体一つ屋根の下と言っても・・・一緒の部屋で寝泊りするわけじゃないし・・・人の出入りもそこそこあるから・・・そもそも2対1ってゆうのは・・・」

「でもやっぱり緊張しちゃうよ。マリアさんみたいなキレイな人と一緒だと……………」

「……………」

「フッ！（ドカッ！）」

「ゴフウ！？…………ア、アラシ…………いきなりどうし…………て…………ガクッ」

「お嬢さま、愚兄が変なことを口走りましたので処理しました。『可愛い女の子』の中にお嬢さまを含めないとは……………」

「…………よくやった。私が48の殺人技と52のサブミッションを連続でかける手間が省けた…………私はもう寝る！！ハヤテにはよ……くっ！言っておくようになっ！！」

「仰せのままに」

ギイイイバタンッ！！

「あの…………どうなさったんですか？」

「いえ、気にしないでください。兄の悪い癖が出ただけですから・・・はぁ・・・」

近いうちに兄の女心のわからなさを矯正したいと思った弟君なのであつたあ

第十一話 「……マリア……それは人間ではない……どこかのDrin

聞いて下せえ……

十話をアップしてから仮眠を取ったり夕飯食べたりしていたのですよ……

その後この十一話を書いていたのですが……

この数時間で日刊ランキングが20位近く上がっていました。

『頑張ろっ』と思いました……

第十二話 今日から執事！！（前書き）

最近作業用BGMに千本桜を使っております。

キーボードを叩く速度が上がるんです。やはりテンポのいい曲だからだと思っんですけど・・・

他に何かテンポのいい曲でオススメっておりますかね？教えて下さると嬉しいです^^

第十二話 今日から執事!!

a r a s i S I D E

翌朝・・・

「おお・・・これは・・・アラシはどうっ?」

「執事服って言うのは初めて着たけど・・・でもこつもサイズが合うものが都合よく・・・」

「サイズはどうですか?」

「はい!!ピッタリです!!」

「はい、ピッタリなんですけど、あの・・・もしかしてコレって・・・マリアさんがあの後仕立て直したなんてことはありませんよね?」

「あら・・・アラシ君よく気がつきましたね?」

「え?これマリアさんが・・・?」

「昨日はもう晩かったのに……ありがとうございます、マリアさん」

「いえいえ……それだけ感謝してくれば十分ですよ。では……お仕事に参りましょうか。」

「それで……仕事はどんな事をするんですか？」

「ハヤテ、今は年末だし掃除じゃないか？料理は最低でも試食してもらって許可がでたらだろうし……」

「んーそうですねー……アラシ君の言うとおりで片っ端からお掃除ですかねー？」

掃除か……ならどうにかできそうだな……ここを追い出されたらハヤテの不幸体質ですぐさま借金取りに捕まりそうな気がするし・

・・・

ハヤテ&アラシ 「(がんばろう・・・!!)」

「あ？お嬢さまおはようございます。」

「ん？ああ、おはようマリア。」

「お嬢さま、お早う御座います。昨夜はよく眠れましたか？(ニコッ)」

「う・・・うむ、おはようアラシ。き、昨日はしっかり眠れたぞ／＼今日からしっかり頼むぞ？」

「見て下さいお嬢さま？この服・・・マリアさんが仕立て直してくれましたよ？」

「・・・(ジーーーーー)」

「——って、あれ？」

「悪かったな！―どうせ私にはできないよ！―！」

「（・・・・・・？）」

「ま・・・しっかり頼むぞ・・・あと私の書斎には近づくなよ。」

「・・・なんか僕のとだけ急に冷たくなった気がするんですけど・・・」

「自業自得だよ・・・」

「どちらかと言うと・・・熱くなりすぎている気がしますけど・・・」

「まー！何にしても！―失った信頼は・・・仕事で取り戻して見せますよ！―！」

「え？あの・・・・・・」

「あー！！これ掃除道具ですね！！任せて下さい！！まずはあっちの

部屋からピカピカに見えますから！！っおおおがんばるぞ〜
」！！」

「……………」

「……じゃあ、僕はこっちの部屋からやっていきますね？お嬢さまのためにがんばってきます。」

「あ、はい。お願いしますね。」

~~~~~

## 第十二話 今日から執事！！（後書き）

今回は長さが微妙で区切りが悪かったなのでここで切ります。

いつもより短いですが今日中にもう一話上げますのでご勘弁を・・・

## 第十三話 嫌な予感（前書き）

お気に入りが100件を突破してヒャッハーーな気分です!!

### 第十三話 嫌な予感

「あー！これ掃除道具ですね！！任せて下さい！！まずはあっちの部屋からピカピカにして見せますから！！うおおお頑張るぞー」

「……………」

「…………じゃあ、僕はこっちの部屋からやっていきますね？お嬢さまのために頑張ってます。」

「あ、はい。お願いしますね。」

~~~~~

「…………さっきのは良くなかった…………さっきのような事での態度では、いくらなんでも心が狭すぎる……………」

「あら、こんな所に？この時間は書斎かと思っていましたけど？」

「ん？ああ…………調子が悪くて…………ハヤテとアラシは？」

「お掃除を手伝ってもらっています。やる気に満ち溢れていますわ。」

「書斎には近づかせないでくれよ。あと・・・私の事、何か言っていたか？」

「ハヤテ君はお嬢さまの信頼を得るために、アラシ君はお嬢さまの為に頑張るといつてましたよ。まあ、何か思うことがあるなら・・・直接お話になった方がよろしいかと思えますけど・・・」

「そ・・・そうだな！まずはお互い話をするのが大事だな！」

「はい？（特にあなた達はね・・・）」

「じゃあちよつと2人のところに行ってくる！！」

「やんわり誤解を解いてくるんですよ～～～？」

ギィィィバタンッ

タッタッタッタッタ・・・タッタッタッタッタ

ガチャ

「あの！！マリアさん！！一部屋、掃除が終わったので見に来てくれませんか！？——って、どうしましたか？」

「いえ・・・ハヤテ君とナギはとことん噛み合わないなあ・・・と。」

「でもまだ一時間も経ってませんけど・・・」

「はい！！とりあえず手順を確認してもらいたくて！！」

「手順って・・・え？なんだか・・・すごくキレイですね・・・」

「そうですか！？ありがとうございます！！」

~~~~~ハヤテ手順説明中~~~~~

知りたい方は後書き参照

「それにしても感心しました。ハヤテ君・・・お掃除とても上手な  
んですね。」

「え？そうですか？ありがとうございます！！高級品は特別な手順  
があるのかもって不安だったんですよ。」

「いえ、全部正解ですけど・・・よくご存知でしたね？そんな  
こと・・・」

「いやあ～～9歳の頃から年齢偽って清掃のバイトで親の酒代稼い  
でましたから／＼／＼と言っても全部アラシが教えてくれたこと  
なんですけどね？僕よりも掃除が上手なんですよ～～」

「（言葉の端々に笑えない話を自然に入れてきますね・・・どう返  
していいのかわかりませんよ・・・）・・・ではその調子で  
次の部屋もお願いできますか？」

「はい！！喜んで！！」

ギィィィバタンッ

タッタッタッタッタ

「（クラウドさん・・・ハヤテ君たちなら簡単に試験を突破してしまいそうですね・・・ていうか、アラシ君は小さい頃からすごかったんですね）・・・あ！？そういえば・・・書斎のこと言い忘れていましたけど・・・大丈夫かしら・・・？」

しかし久しぶりに人に褒められた少年は調子に乗っていたあ――

「よーし！このまま屋敷中を掃除して・・・もっとマリアさんに褒めてもらおう！！そうすればお嬢さまの機嫌も良くなるに違いない！！そのためにはまず・・・この迷路のような屋敷の構造を理解しなくては！！」

~~~~~屋敷のとある一室~~~~~

「（ゾクッ）・・・なにやらハヤテが変な事をしてお嬢さまを怒らせて屋敷から追い出される気がする・・・」

~~~~~

後にアラシが『あの時止めに行っておけば・・・』と後悔することになるのは必然であつたのだろう

「うゝん・・・すっかり迷子だ・・・」

必然であつたのでえすう

(CV:「フグタくゝん」がお送りしましたあ)

### 第十三話 嫌な予感（後書き）

「あら？これは・・・」

「はい！！そちらの取っ手は銀製だったのでシルバードスターを使  
って磨きました。」

「え？」

「こちらの銅像は真鍮<sup>しんちゅう</sup>ブラシで汚れを取った後、薄い中性洗剤で洗  
浄して・・・水気を取ってワックスで仕上げました。カーペットは  
ウール製のキリムだったのでお湯を使わず、冷水に頭髪用洗剤と塩  
を少し加えて、色落ちしないように気をつけて軽く・・・ってあの  
僕マズイことでもしちやいました？」

「いえ・・・素直に驚いているんですよ。」

第十四話 予感的中（前書き）

ただ今の時刻

3：32

ひたすら眠いっす

## 第十四話 予感的中

h a y a t e S I D E

「うゝゝん・・・すっかり迷子だ・・・」

屋敷の構造を把握しようとして走り出したのがちょうど10分ぐらい前だったけど・・・迷子になるほど広いのにどこらへんが小さいんだろう？

「しかし本当に広いなあ・・・いったい幾つ部屋があるんだろう？そしてまた・・・新しい部屋が・・・」

見つけた部屋に片っ端から入ってみてるけど・・・全く人の気配がしないよ・・・

「ここはまたハズレかな？」

《書斎》

ガチャリ・・・

「あ……でも……ここは結構……人の気配がする……ん？」

なんだこのノート……

お嬢さまの学習ノートかな？

「な……こ……これは……！」

【あっしのマジカルパワーで……！！決着をつけてやる……！】

<マジカル全滅ビーム……！！>

「な……っ……なに……！」

カッ……！

くっくく……なかなかやるな……だが私には効かぬわあ……！

【ば……ばかな……！……あっしのマジカル絶滅ビームが……！】

だめだよブリトニーちゃん……！アイツにはマジカルパワーが効かないんだ……！

「・・・・・・・・・・・・・・・・絵日記？」

い・・・いかん！！こんなプライベートなものを見ては！！こんなこと・・・こんなことお嬢さまに知られたら・・・！！

「おい・・・人の部屋で何を勝手に見ている・・・」

「お、お嬢さま！？いえ！！こ・・・これはその・・・！！」

「あ！！それは私のまん・・・」

「だ・・・大丈夫です！！ほとんど読んでませんから・・・お嬢さまのこの絵日記は！！」

ビキッ！！

「あ・・・あれ？」

「え・・・絵日記・・・だと・・・」

「はい！！・・・え？あれ？」

お嬢さまの後ろに『ゴゴゴゴゴゴゴ』って文字が見える気が・・・？

「こ・・・この・・・バカア！！！」

「お・・・お嬢さまぁ！？」

「うるさい！！お前なんかもう知るもんか！！人の気持ちも知らないで！！ハヤテのバカ！！バカバカバ————力！！！！もう出て行け————！！！」

ガッシャーーン（門の閉まる音）

「あんなに怒らせてしまつては・・・もう合わせる顔が・・・」

あれは・・・よっぽど大事な絵日記だったんだなあ・・・さよならアラシ・・・僕はまた違うところで住み込み仕事を探すよ・・・仕事を見つけたらすぐに会いに来るから・・・

トントントン

「ん？」

「やあハヤテ君。ようやく会えたな・・・」

「あ・・・どうも・・・」

借金取りが現れた！！

「ごめんアラシ・・・もう会えないかも・・・」

「オラァ！さっさと乗れ！！」

「おい、一人足りなくねえか？」

「ああん？・・・チッ、ならコイツから二倍臓器をとりゃいいだろ？」

「ヒイイイ!!」

ブoooooooooooooooo

「……………（スッ）いいんですか？」

「何がだ？」

「ハヤテ君本当に出て行ってしまうけど……………」

「は!?!いやいや!!私は部屋から出て行けと言っただけで、屋敷から出て行けなんていったつもりは……………!!」

「あ……………」

……………その頃……………

キュッキュッキュッキュ……………

「ふう……………これで二十部屋目も終わりつと……………（ヒイイイ!!）ブoooooooooooooooo

)  
.  
.  
.  
.  
ん  
ん  
!  
?  
「

## 第十四話 予感的中（後書き）

アラシの累計掃除時間

1時間37分

掃除した部屋の数

20部屋

## 第十五話 天邪鬼

「しかしまあ……世の中には酷い親もいたもんだ。自分達が博打で打った借金の返済に、自分の息子を売るなんて……こんな親、もう人として最低だな。」

「まったく……日本って国はどうなっちまうんですかね」

「ほんとほんと、売られる子供の身にもなれって話ですよね？」

「ま、それでも買うだけだな。」

「ですよね~~~~~（、・ω・、）」

こうして少年のつかの間の幸せ（累計13時間ほど）は終わりを告げた……

~~~~~

「は……外は寒そうですね……こんな寒空の下、帰る家もないのに追い出されたら……さぞかし辛いでしょうね~~~~~」

ピキッ・・・

「わっ・・・私は部屋から出て行けと言っただけだ！！それなのに何を・・・！！大体出て行けと言われたくらいで出て行く奴がいるか！！それに掃除とはいえ、人の部屋に勝手に入るなど・・・怒鳴られたって文句は言えまい！！」

「まあ、怒鳴った理由は部屋に入られた事よりも・・・せつかくの自信作を『絵日記』呼ばわりされた事にあるような気がしますけど・・・」

ギクッ！

「そもそも大事な物をしまう癖をつけないからこんな事になるんですよ？」

グサッ！

「日頃から部屋の掃除は人任せ、着ていたものは脱ぎっぱなし、身の回りの物くらい自分で整理する癖をつけなさいって日頃からあれほど言っているのに・・・」

ザクッ！

「それにあればハヤテ君の失敗と言うより・・・ちゃんと注意しなかった私失敗ですし・・・いいんですか？このままで・・・」

「……………（ツーン）」

「まあ……………でもお嬢さまがそこまでおっしゃるのでしたら仕方ありません……………ハヤテ君の事はこのまま忘れましょう!!」

「えっ？」

「元々ハヤテ君はお嬢さまが独断で雇うと決めただけ人……………そのお嬢さまが『もう用無し』と言うのなら、もはや引き止める理由もないですし……………」

「え? いや……………!? それはその……………」

「それに執事はアラシ君一人でも十分だと思いますし……………ハヤテ君の事を嫌いになったのならむしろこのままの方が……………」

「いや!! だからキライになんか——」

「キライになんか?……………なんかの後は何ですか?」

「……………// // //」

「なんかの後は何が続くのでしょうかね〜」

「ゴホンッ・・・ま、ハヤテは恩人だ。恩人を見捨てるようなマネ・
・三千院家の人間として・・・するわけにはいかん!!」

「・・・本当にこの子は・・・天邪鬼なんですから・・・」

「・・・何か言ったか？」

「何か聞こえました？（ニコッ）・・・でも、どうやってハヤテ君
を探すんですか？」

「なあに、どうせハヤテなら・・・すぐに借金取りに捕まってるは
ずだ。ヤクザでも金貸しなら三千院家の情報網で見つからないはず
がない。」

ピッ・・・トゥルルル・・・トゥルルル・・・ガチャ

「はい、こちらクラウドでございます。」

「クラウド、私だ。大至急、調査と手配してもらいたい物がある・
・・・」

「・・・かしこまりました。では、30分程お待ち下さい。」

・・・ピッ

「ふう・・・さてと・・・では、マリア・・・後は任せた。」

「は!?!・・・まさかと思えますけど・・・今更『ちょっと言い過ぎたかな?』とか思っ、それで私に行けと言っているのではないですよ・・・?」

「・・・・・・」

「お嬢さまがハヤテ君の主ですよね?」

「じょ・・・冗談だよ冗談!!自分で行くに決まっているだろ!?!」

「ですよね~~~~?・・・だそうですね~~~~♪アラシ君?」

・・・ガチャ

「お嬢さま・・・勿論一緒にさせていただきます。」

第十六話 お馬鹿な執事と天邪鬼なお嬢さま

h a y a t e S I D E

ザザーン・・・ザザーン・・・

「オラ、着いたぞ。」

「さっさと降りろ!!」

「あの・・・もしもし?ここはいつたい此処はどこなんでしょうか?」

「あ~~~~ん?・・・病院」

ギィ~~~~ガラガラガラ

「・・・・・・（港の倉庫の中にある病院って・・・・）」

マズいぞ・・・・これはいつ殺されても不思議じゃない・・・

どうにか早く逃げ出さないと・・・

「そう心配しなくても・・・別に殺そうって訳じゃねえ・・・」

「え!？」

「取れる臓器とってお前をここから外国に売るだけだから・・・」

それは殺されるよりヒドイのでは!？

「あゝ・・・僕、急に用事思い出しちゃった・・・と言うわけで帰ります!!」

ここは逃げるしかないっ!!

「あっ!!」

「待ちやがれこのガキ!!」

「あの野郎!!またあの足の速さで逃げる気だな!!」

「そうはさせるか!!」

「ああっ!!!!」

「だいたいてめえの親が悪いんだろ!!金がないなら身体で払うしかねーだろうが!!」

「大丈夫」肺も肝臓も心臓も2つあるから?

僕の心臓はひとつしかありませんよ!?

「うるさい!!金がねえヤツはとっとと売られる!!」

「嫌だー!!!!そんなアバウトな臓器の数え方してる人に売られたくなー!!い!!!!助けてアラシーーーーー!!!!」

ブンッ・・・ドカツ!!

「ゴホアッ!!」

「助けてやろうか?」

「だっ！！誰だお前は！？」

~~~~~  
~~~~~

??? SIDE

「だっ！！誰だお前は！？」

「お前達のような馬鹿共に・・・いちいち名乗る名前はない・・・」

「態々お出にならなくても僕が全部やりますのに・・・」

「そ・・・その声はまさかお嬢さまとアラシ——！！」

そこには某武装で錬金なあマンガのパピヨ・マスクをシンプルウにしたタイプの白い仮面をつけたよ～～く見覚えのある少女とお、同

あじ形をした黒おい仮面をつけたこゝれまた見覚えのある少年がいたあ

「あ・・・あの・・・何をやっているの・・・？お嬢さまとアラシは・・・？」

「わ・・・私はお嬢さまなどではない!!」

「え？・・・は・・・はあ・・・？」

「私の名前は・・・え・・・えーつと・・・『マスク・ザ・マネー』だ!!」

トントン

「お嬢さま、ここは強引に話を進めた方が・・・」

「今絶対お嬢さまって言った!!絶対言ったよね!？」

「さあ？何の事だか解りかねますね？」

「おう、てめえら!!素人がヤクザなめてると・・・」

「頭の毛が薄い方は黙ってて下さいますか？今お嬢さまが大事な話をされますので。」

「ほら今言つたよね！？ていうかアラシでしょ！？」

「はて・・・？何のことでしょう？お嬢さまがお話があるそうなので黙ってくれませんか？」

「ここまで堂々と『お嬢さま』って言ってるのに惚けるなんて・・・」

「け・・・毛が薄い方・・・」

「だ、大丈夫ッス！！兄貴はハゲてないっす！！フサフサっす！！」

「では・・・どうぞお嬢さま・・・」

「もう僕は突っ込まないぞ・・・」

「あ、ありがとうアラス・・・ゴホンッ・・・えー、私は・・・ナギと言う少女に頼まれて来た者だ！！」

「い、今アラシって言いかけ『お嬢さまのお話を遮らないでもらえますか?』・・・はい・・・」

「で!・・・その少女からの伝言なのだが・・・さ・・・さ・・・さつきは怒鳴ってごめんなさい」・・・と・・・その・・・伝えて欲しいと・・・あ!・・・あとお前が見たノートの中身は一応、彼女の自信作『世紀末伝説マジカルデストロイ』と言う漫画であって・・・けっして絵日記などではない!!!」

「あ・・・はい・・・わかりましたすみません・・・マスク・ザ・マネーさん・・・」

「あ、私からも一言申させていただきますと・・・自分の仕える人のノートを勝手に読んでそのせいで追い出されて弟に心配をかける兄はサイテーだと思いますか?その少年。」

「・・・ゴメンなさい・・・」

「誰に謝っているのですか?そういうことは本人に謝った方が良いと何故解らないのですか?あなたの頭はスカスカなのですか?」

「本当に・・・ゴメンなさい・・・」

「まあ、アラシ……ゴホンツ……もう彼もわかったみたいだからそこまでにして……あと君もあの家で執事を続けるといい……その方が彼女もうれしい……と思う……」

「は……はい？」

こうしてお馬鹿な執事いと天邪鬼うなお嬢さまの喧嘩は終結したのおであつたあ

「そうはいかねえに決まってるだろうが……!」

第十六話 お馬鹿な執事と天邪鬼なお嬢さま（後書き）

同日：『マスク・ザ・マネー』を入れ忘れていたので訂正

第十七話 それ・・・犯罪ですよ？

「あと君もあの家で執事を続けるといい・・・その方が彼女もうれしい・・・と思う・・・」

「は・・・はい？」

こうしてお馬鹿な執事いと天邪鬼うなお嬢さまの喧嘩は終結したはずであったのだが・・・

「そうはいかねえに決まってるだろうが!!」

「そうはいかねえに決まってるだろうが!!コイツにはこんだけの貸しがあるんだ!!この借金がある限り、こいつはオレらの物なんだよ!!」

「そんな違法金利の紙切れがどうした？黙れといったのが聞こえなかったのか・・・このハゲ!!」

「「「「・・・」」」」

「こ・・・このガキ・・・」

「お嬢さま・・・この際なので私からも一言言わせていただいても宜しいですか？」

「ん？言いたいことがあるなら言ってやれ。」

「はい、では・・・今ハゲの方が『コイツにはこんだけの貸しがある』と言いましたけど・・・あなたは間違っています、彼はあなた方に貸しなんて元からないのですよ？」

「ハゲの方・・・」

「大丈夫っす！アニキの髪はまた生えてきますって!!」

「は？・・・何言つてがんだ？実際ここに借用書があんじゃねえか？」

借金取りは三人組です

「それは彼の親の借金であつて彼の借金ではないのですよ。民法上親が背負つた借金を子供が代わつて借金を肩代わりする必要は親の財産を相続する場合と例外を除けばありません。支払債務は『自ら債務を負う』との意思表示をした場合に生じる』というのが原則なのです。彼はまだ『自分が親の代わりに支払います』なんてことは言つてませんから・・・あなた達が彼に行つた行為は法律的に見ると『略取・誘拐罪』^{じやくしゆ・ゆうかいざい}といつて犯罪です。他にも彼に暴力を振るつたようなので『暴行罪』と、外国へ彼を売る様でしたから『所在国外移送目的人身売買罪』をつけましようか？あ、でもこれはまだ未遂ですね・・・でも以前にやっているようなので別に構いませんよね？だから・・・さつさと彼を帰してくれませんか？犯罪者に手加減するほど僕は優しくありませんよ？（ニコツ）」

「「「「「・・・（ポカーーン）」「「「「」

「アラシ・・・お前頭が良かったんだな・・・／／／」

「いえいえ、こんなこともあるうと以前から少しずつ調べていただけです。生まれた頃から『もしかしたらこうなるかも・・・』ってわかっていましたから・・・一応貯金もしていたんですけど300万円ほどしかないので一億五千万なんて大金どうしようもなかった

「んですよ・・・で、犯罪者さん、これからどうしますか？訴えちゃいますよ？」

「う・・・うるせえ！！そんな事しらねえ！！コイツはオレらの物なんだよ！！返して欲しけりや今すぐ一億五千万円全額返済してみやがれ！！」

「キヤ~~~~~！助けて~~~~~！！！！！！」

「してやるよ・・・・・・・・・・」

「「「あ？」「」」

「ほら全額返済。」

ガパッドサドサドサ・・・

「まさか・・・全部本物？」

「当然だ馬鹿者！！・・・これで・・・文句はないだろ？」

「お嬢さま・・・態々犯罪者に払わなくてもいいお金を払わなくても・・・」

「お前らが払わないとお前らの親が困るんだろう？・・・ならこれ位プレゼントするさ。」

「・・・おい、そいつを離してやれ。」

「え！？いいんすか？アニキ！！」

「金を払わない奴には容赦しねーが・・・払えば客だ。手は出さねーよ・・・お前ら、引き上げるぞ！！」

ブロロロロロ・・・

「では・・・私達もこれで・・・行きましょーうお嬢さま。」

「うむ。」

「ちょ・・・待って下さい！！マスク・ザ・マナーさん！！・・・あの・・・お嬢さまにあつたらこのお金は全額働いて返すから・・・これからも執事の仕事をよろしく・・・とお伝え下さい。」

「ですが、そのお嬢さまはその金をただでプレゼントしたつもりのようですよ？ね、お嬢さま？」

「うむ、そのとおりだぞ。」

「駄目だよ・・・働いて返さないと・・・だってそんなの悪いじゃないか！？そんなおかしなマスクをつけて助けに来てくれたのに・・・」

「（ビキビキッ！）」「」

→ちよつとカッコいいつもりでした

「だからそのお金は・・・」

「働いて返せ！！」「」

「・・・え？」

「やはりお金の貸し借りは白黒はつきりつけないと正義のために良くない。だからそのお金はお前が馬車馬のように働いて・・・持ち主である三千院ナギに一元残らず全額返せ！！いいな！！」

「その通りです！！お金の貸し借りはしっかりしないといけませんからね！！あなたが責任もって返すべきです！！あと、これは弟さんからの伝言ですが・・・『この件はハヤテのせいだから自分で全

額返すんだぞ!!』だそうです。」

「え・・・ええ!？」

「そうだな!!ナギ君も『全額ハヤテ君一人で返すべきだ!!』と言っているようだからな!!しつかり返すんだぞ!!絶対・・・!!絶対ビター文まけてやらないんだからな!!」

「ええ!?!・・・あ・・・はい・・・」

・
こうして晴れて一億五千万がハヤテ本人の借金になったという・・・

第十七話 それ・・・犯罪ですよ？（後書き）

S P 「あの・・・なにやらケンカが始まったようですが・・・いいんですか？止めなくても・・・」

マリア 「いいんじゃないですか？兄弟みたいで？」

第十八話 借金執事誕生？

借金取り（三人組のヤクザとも言つ）からハヤテが開放された翌日の屋敷にて……

「全額返済まで……およそ40年ですね。まあ……額が額ですからね……無理のない返済計画ではこうなるでしょう……」

「……………（汗）」

「言っておくが無利子、無利息、無担保、出世払いで一億五千万も貸してくれる金融機関はないんだからな！！感謝こそされても、うらまれる筋合いはないぞ！！」

「だ……大丈夫……ですよ？感謝は……してますから……（チラッ）」

「……いくらこつちを見てもこれは全部ハヤテのせいだから僕は絶対に助けないからな？（ニコッ）」

「そ……そんなあ……（涙）」

少し位は助けてくれるであろうと思っていた弟にキツパリと拒否され、自分ひとりでこの莫大な借金を返さなければならぬ現実には早くも心が折れそうなハヤテなのであった……

~~~~~

「ていうか、2人も要りません!!」

「「「「……」」」」

「もともと以前のお嬢さまの執事である姫神は1人でも十分職務を全うしていました。この2人も能力はあるようですから2人も雇う必要はありません。当然じゃないですか。」

「……なるほど……つまりんジョークをいうのはこの髭か？どうなのだクラウス……？」

ぎゅっぎゅっぎゅっ……

「あいたたたたた……私の自慢の髭が……」

「私の命を救ってもらった礼に2人とも雇うと決めたのだ！！この決定に変更はない！！」

「もともと後任の執事は私が決める約束だったはずですよ！！お嬢さまの頼みでもこればかりは譲れません！！それに話を聞いたところでは、このアラシと言う少年は姫神よりも優秀だそうですね？ならば、このハヤテとかいう貧乏くさい少年は雇わなくても良いでしょう！！」

グサツ！！

「貧乏くさい……」

「そりや確かにハヤテはアラシと比べるまでもないほどに顔は貧相極まりないが、それがまた人を和ませるのだ！！それに甘い物を食べたらしょっぱい物も欲しくなるだろう！？兄弟セットならお得（？）じゃないか！！」

「そんなにしょっぱい物が欲しければ三千院家SP部隊の皆さんで

も眺めていればいいでしょうが!」

グサッグサッ

「しょ・・・しょっぱい物・・・」

「大丈夫だハヤテ・・・しょっぱい物が好きだって人は世の中たくさんいるぞ・・・」

「いいや!!SPなんかよりハヤテのほうがよっぽどしょっぱいね!!SPはまだしょっぱさがぜんぜん足りないねっ!!」

「それは認めましょう!ですがあんな貧乏くさく一生金に縁のなさそうな少年を雇っては周りが不幸になりかねません!!」

ズーン・・・

「あの・・・2人とも悪気があるわけじゃないんですよ・・・」

「大丈夫だって！梅干好きな人日本には多いだろ？だから大丈夫だって！！いいじゃん貧乏くさくても！！梅干はみんなの味方（？）だよ！！」

トントン

「な・・・何ですか・・・僕は落ち込んでいるんですけど・・・」

SP1「お仲間ですね・・・」

SP2「好きでしょっぱい顔をしている訳ではないんですけどね・・・」

SP3「・・・（グッ！）」

SP4「頑張りましょう・・・しよっぱい物どうし・・・」

「う・・・うわーん！！！！（滂沱と流れ落ちる涙）」

借金執事（仮い）の苦勞はまだまだあ続くのであつたあ

## 第十八話 借金執事誕生？（後書き）

アラシ「あの・・・マリアさん、お願いがあるのですが・・・」

マリア「はい、わかっていますよ。ハヤテ君の借金のことですね？」

アラシ「はい・・・もしかして最初から気づいてました？」

マリア「ええ、わかりやすかったですよ？ハヤテ君は気づいていませんでしたけど、傍から見れば心配そうにしていることなんて簡単にわかりました」

アラシ「／／／・・・じゃあ、僕の給料からもお願いします。」

マリア「はい？わかってますよ」

## 第十九話 たわらばっ！？（前書き）

知っている方はサブタイトルでもうお解かりでしょう。

アラシは某ネギの世界の筋肉ダルマの強化版とだけ言っておきましよう

あれ・・・？

ナギの期待に応えようとしたら・・・

あれえ？？？

作者はヤッちゃったんだ♪

## 第十九話 たわらばっ!?

「このままでは平行線のようなですね・・・では、ハヤテ君には試験を受けてもらいましょう。これで合格すればお嬢さまの仰るように2人ともわが三千院家の執事として正式に雇いましょう。」

「え？僕はいいんですか？」

「ええ、君の強さは先日見させてもらいましたから・・・お嬢さまの執事たる者、命に代えて主を守る強さが必要ですから、君はその点十分合格でしょう。」

「ふ・・・何だ強さか・・・だったら問題はないぞクラウドス!!」

「へ？」

「言っておくがハヤテは変身するたびに戦闘力が上がるのだ!!その変身を二回もハヤテは残している。この意味がわかるな・・・」

「な・・・なんですとお!!（ピシャーーンッ!!）」

「ええ！？いやいや！！そんな設定はないですよ！！」

「ええ~~~~~！ないのか？本当はないのか？」

「僕は一応人間ですからそんなことできませんよ！？」

「ええ~~~~~、見たかったのになぁ・・・変身・・・」

「・・・ならここは変身とまではいきませんが僕が」

「ええ！？アラシは変身ができるのか！！（キラキラーンッ）」

「ええ、お嬢さまが見たいと言うのならば。・・・これは禁呪です  
まだ完全にモノにしたわけではないのでダメージを受けてしま  
いますが・・・」

「え？禁呪！？なにそれ！！アラシそんなことできるなんて僕聞い  
たことないよ！！」

「当たり前だよ、言ってないし。それに夢に出てくるバカサントが

勝手に教えていく奴だから。あいつ覚えるまで帰さないとか言ってくるし……。だからあんまり使いたくないし……」

「早く!!! 早く!!!」

「では……。スウーーーー……。」

ズズズズ……

「プラ・クテ・ビギナル! 来れ<sup>アキデ</sup> 深淵の闇<sup>テネブエラ・アビュシ</sup> 燃え盛る大剣!!! 闇と<sup>エト・インケ</sup>  
影と憎悪と破壊復讐の大焰!!! 我を焼け<sup>メー・エト・エウタシント・ソールム</sup> 彼を焼け其はただ焼き  
尽くす者『奈落の業火』!!!!」

ガギユギユギユ!!!!

「おお!!!!!!」

「「「(ポカーーン)「「「」

「グウウウウツ！！術式固定！掌握！魔力充？・『術式兵装』！  
スタグネット コンプレクシオザレメントウム・プロアルマティオーネム

「おお！おおおお！……スゴイ！……凄いぞアラシ！」

ビキッビキッ・・・ビシッ！！！！

「あ・・ありがとうございますお嬢さま・・ですがまだ・・この術は直接魔法を体に取り込む物ですから・・モノにしてないとリスクが・・やはりまだ・・無茶・・だっ・・た・・たっ・・」

ドッカーン（爆）！！！！！！

「ええええー！！爆発したー！！？」

「流石アラシ……最後に爆発するとはよく分かってるなッ!!」

今日うもお嬢さまはご機嫌であつたあ（C V'（r y）



## 第十九話 たわらばっ！？（後書き）

闇の魔法：術式兵装・．．．ネギま！より  
アルマデイオーネム

ネギま！を知らない方は．．．

どうぞ調べてみて下さい！！

いっぱいネギま！の二次創作はこのサイトにありますから！！

あと、今回の物はあくまでネタです。

今後出す予定はありませんので．．．

．．．ネタとしてはあるかもしれませんが

あと、エイトのくだりいますか？

いらなかったら飛ばしたい．．．

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1276ba/>

---

アラシのごとく！

2012年1月9日20時51分発行